

サキ “The Mapped Life” の再読

市川 亜梨沙

本論では、サキ (Saki, Hector Hugh Munro, 1870-1916) の短編小説「マッピング・ライフ (“The Mapped Life”）」において、サキの作品に通底する特徴である「姪」表象と動物表象が、彼の作風に重要な転換を示すものであることを明らかにする。

「マッピング・ライフ」は、ロンドンを舞台に、動物園と中上流階級の人間の生活を照らして描いたもので、作中では利発で雄弁な少女が、鋭敏な感性を持つ野生動物について、そして動物園の動物と同等の、不自由な人間の生活について語る。少女と動物の双方とも、サキが生涯にわたって扱い続けた主題を象徴しており、少女の像は大人対子供の相剋、動物の像は人間社会への諷刺にそれぞれ通じる。サキはこれらの表象と主題を様々な形で繰り返し描いたが、「マッピング・ライフ」では両者が混在するのみならず、両者を新たな意味へ転換するという試みも行っている。したがって、「マッピング・ライフ」を再読する試みは、サキが著した諷刺全体を再検討することに繋がると言えよう。

第一章では、少女の像、特に「姪」表象について論じた。サキの短編小説における大きな特徴の一つに「おば」の存在が挙げられる。各作品の「おば」同士に連関は無いが、何者かの「おば」であり、子供の保護者（時として支配者）を務め、往々にして作中で悲劇的な結末に見舞われる、厳しく口やかましい成人女性という像は、作中に最も頻繁に登場する人物の顕

著な一例である。従来のサキ批評では、これらの「おば」像はサキ自身の幼少期の体験の反映と解釈され、サキが繰り返し「おば」たちを悲劇に導くのは、現実の「おば」への復讐であるとさえ考えられてきた。事実、作者自身の過去の体験は「おば」像形成の大きな要因には違いなく思われるが、作中における「おば」の扱いを単なる個人的復讐とは見做せまい。サキが人間社会や文明への諷刺に力を注ぎ続けた事実からすれば、子供に「常識」や「教育」を押し付けようとする、慣習に凝り固まった「おば」の像は、家庭という小さな世界における社会的権威や圧力の象徴に相違なく、それを退ける試みにこそ、サキが行った文明社会諷刺の本質があるはずである。

一方、サキの作品には、「おば」の頑迷、愚かさ、旧弊な性質に相反する、柔軟かつ聡明で、進歩的な少女がしばしば登場する。「おば」と同様に、これらの少女たちも各作品の中で異なる名前、立場、状況を与えられるが、彼女たちの性質はどの作品においても共通している。その中でも特に目立つのは、複数作品において同じ名前で描かれる「ヴェラ」という少女の存在である。彼女は年若く、饒舌で、即興の法螺話と機転により、大人たちをことごとくひどい目に遭わせる。そしてまた、多くの場合、「ヴェラ」は誰かの「姪」というアイデンティティを付される。「姪」という記号は、大人たちの旧弊な体質に占領された「おば」たちの世界に、相反する人物像を呼び込むための縁としてはたらくのである。「おば」と対を成す要素で構築されたこの「ヴェラ」の像こそ、「おば」対「姪」、すなわち大人対子供の相剋を描く上で、サキが辿り着いた一つの答えだったと言える。

ところが、「マッピング・ライフ」には「ヴェラ」ではない姪が現れる。興味深いことに、「マッピング・ライフ」に至って主人公の少女は名前とという固有性を剥奪され、単にガートルベリー夫人の「姪 (The niece)」とされたまま、作中に君臨し続けるのである。彼女の雄弁さや利発さ、並び

に年若い「姪」であり、最後にはおばをやり込めて泣かせるに至るという特徴は、明らかに「ヴェラ」を踏襲したものである。しかしながら、「ヴェラ」が突拍子もない大法螺で大人に打ち勝ったのに対し、「名無しの姪」は現実社会の真実について、滔々と持論を展開する。また、嘘つきの「ヴェラ」は決して自分について語らないが、「名無しの姪」は自分の人生の展望を持っており、それを語りさえるなど、彼女の人格は明らかに「ヴェラ」のそれとは区別されている。この「名無しの姪」は、「マツピンド・ライフ」の執筆にあたって新たに創出しなければならない少女像であったと考えられる。サキが「マツピンド・ライフ」で試みたのは、現実の社会に対する剥き出しの批判であった。「ヴェラ」は確かに雄弁で才気に富んでいるが、「嘘つき」であるという彼女の特性上、大人、ひいては社会的権威に対して、騙して丸め込み、懐柔して足元をすくうという方法しか取ることが出来ない。「マツピンド・ライフ」では、慣習に閉じこもった人間の生活をはつきりと糾弾することの出来る少女、「ヴェラ」よりももっと素直に、真つ向から社会に立ち向かってゆける強い少女の像が必要だったのである。「名無しの姪」が「名無し」であるのは、単なるアイデンティティの欠如だけを示すものではなく、「ヴェラ」よりもさらに先進的な、まだ見ぬ少女を描こうとするサキの意欲の表れであろう。

第二章では動物表象について論じた。サキが自らの作中で扱った動物は、家畜から野獣にいたるまで幅広く、作品の題に動物の名が付されることも少なくない。この傾向はしばしば、作者が抑圧された孤独な幼少期に種々の動物を飼ったという伝記的側面に結び付けられてきた。だが、サキの作品の特徴は、動物の存在そのものではなく、作中における動物の配され方、それぞれに与えられる特徴的な役割にこそある。

注目すべきは、単に人間が迷惑を被るにとどまらず、これらの動物が人間の手には負えない存在として扱われる点である。サキの作品において、

人間およびその生活に動物が不可侵の優越を發揮する図は、人間の文明や理性を批判し、それらに対する自然や本能を称揚する姿勢の表れであるという指摘が、これまで多くなされてきた。時にはそれがサキの冷徹な筆致と結び付けられ、サキ自身の人間嫌悪の表出だという糾弾を招きもした。しかしながら、実際に作品の主軸とされているのは、あくまで困惑する人間の姿であり、動物はその人間の眼前を行き過ぎるのみである。動物表象それ自体に、自然そのものや、自然讚美の意図を担わせるのではなく、動物を利用することで異なった角度から人間に光を当て、隠された側面を明らかにしているのである。自然讚美や人間批判どころか、動物はあくまで人間を描くための一機構として機能するに過ぎない。サキは動物を人間化せず、また人間の観点から動物を評価することもなく、動物は動物のままに、簡素な文章で作中に取り入れた。それにより、彼の動物表象は、善も悪もなく描かれた動物へ、読者が人間本位のエゴイステックな視線を無意識のうちに向けるという、全く新たな諷刺を獲得することに成功したと言える。

しかし、「マツピンド・ライフ」においてサキは、自ら作り上げた動物諷刺の前提をことごとく覆してしまう。動物が人間に優越することもなければ、動物の行動が人間を害することもなく、あまつさえ、動物園の中の動物と人間が同じ存在であると、作中で直接言及する。これらの動物表象の転換が示すのは、それによって照らし出そうとする人間の姿の転換に相違ない。

「マツピンド・ライフ」でサキが用いたのは、自由に生きる野生の動物と、動物園の檻に閉じ込められた動物という、相対する動物表象である。人間の檻の中の動物になぞらえる「名無しの姪」の主張は、逆説的に、人間の檻の外には何があるのか、人間が檻から出るすべは何かという疑問を抱かせる。その答えの糸口となりうるのは、「名無しの姪」が野生動物の暮ら

しを語る口ぶりの端々で強調する「死」である。檻の外側で生きるとは、すなわち生の実感を持つて生きることであり、生の実感を持つためには、死の実感を持つ必要があるという示唆を、彼女の言葉は含んでいる。さらに、同様の示唆は他作品でもなされている。「猫の成功」(“The Achievement of the Cat”)の中で、サキは、断末魔に発揮される強い意志と闘争心、理不尽な運命に抗議する力は、「人間という動物 (human animals)」の内にも眠るものと述べた。サキは人間に対して否定的な作家でこそあったが、それは人間嫌悪の表れというより、人間の秘めたる姿への期待の表れである。「マッピーンド・ライフ」の動物表象は、人間に暗い現実を突きつけるとともに、新たな可能性への気付きを呼び起こそうとするものなのである。

結論部では、「マッピーンド・ライフ」の執筆において、なぜサキが特異な手法を用いたかを推断した。折しも、サキがこの作品を書いたのは第一次世界大戦直前のことであった。当時の欧州社会にはすでに不穏な戦乱の影が忍び寄っており、「マッピーンド・ライフ」の作中においても、バルカン半島の紛糾に関する言及がなされる。自身も志願して従軍するほど、戦争に寄せるサキの関心は強く、度々戦争に触れる作品を書き、列強が旧弊な体制からの脱却を迫られていると警鐘を鳴らした。揺るぎないものと思われていた当時の社会生活が、抜本から転換してしまう危険性に、サキは思い至っていたのであろう。また、そのように不安定な国際事情なればこそ、厳しい局面を迎えつつある既存の社会体制を脱却し、人間の在り方を模索しようとする境地に至ったと考えられる。「マッピーンド・ライフ」において、「姪」表象に見受けられる新しい少女の像、動物表象に見受けられる新たな生き方のイメージは、行き詰まった社会を打破せんと、時代に先駆けるサキの挑戦であったと言えよう。